

千句園書

萬之校

武

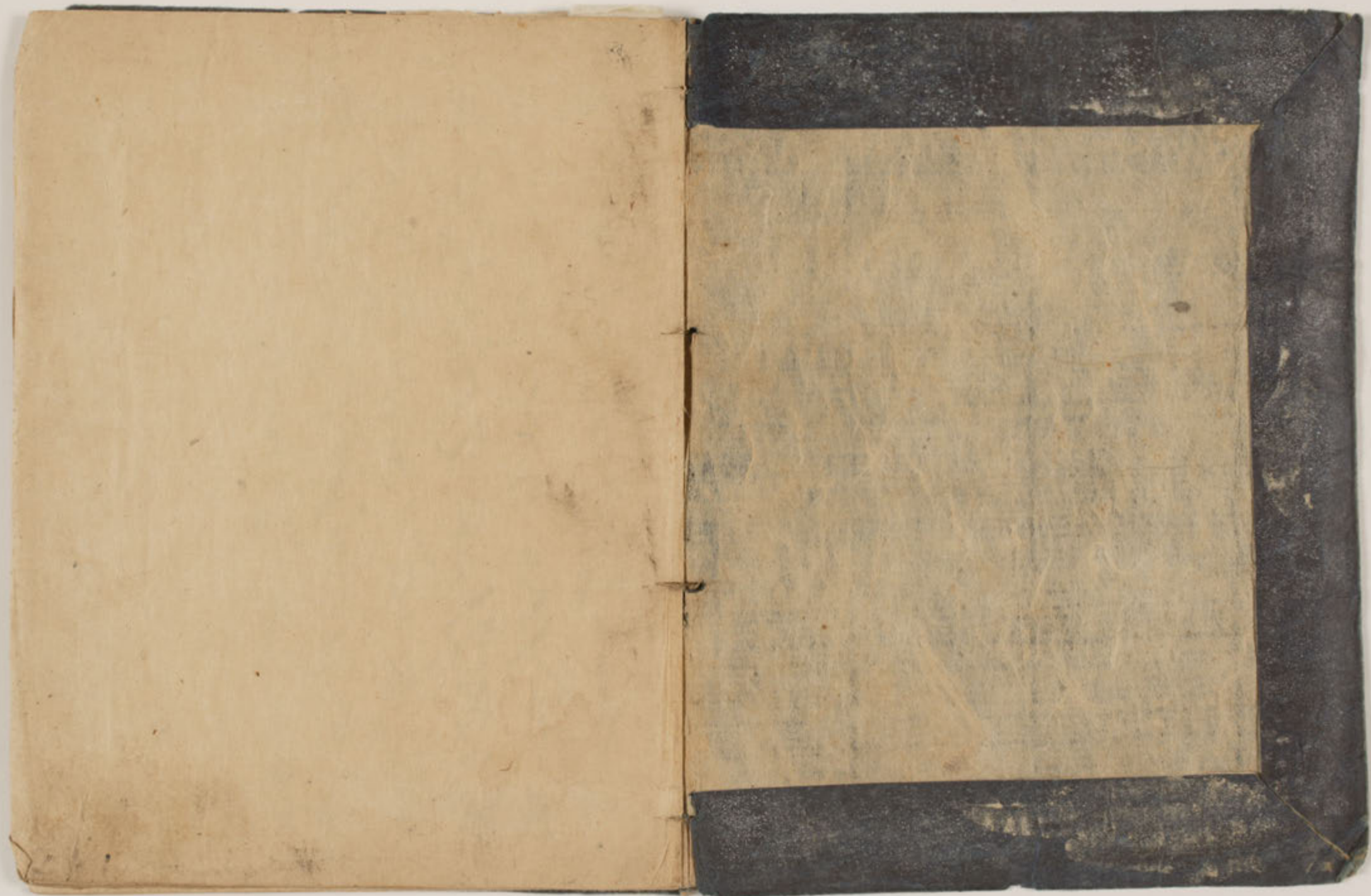
長每公所自筆之

4

五十二内

古抄









初等と今初と云う國の六山と云

天正元年十二月十九日お絶山  
對馬守及例年千句具引

何水書一

梅の香はあまの心と神と好絶  
あけほのうも子心はるる  
ゆじはの書は清きい月々々  
兔

何人書二



ふらふらとせむいふふらふらとせむ  
まじりていふふらふらとせむいふ  
陰うらぬの枝うらうらとせむ  
いふふらと

ねやうと入人のみねはははは  
橋は柳うけく音の戸を  
川まじりぬのゆあけぬとせむ

竹まじり

うらうらとせむいふふらふらとせむ  
花うらぬの枝うらうらとせむ  
玉うらぬの枝うらぬの枝うらぬ

竹まじり

夕まじりていふふらふらとせむ  
うらうらとせむいふふらふらとせむ



水月江多しをこくむさく絶

ふ作廿六

おちるくさひさふり森の枝を  
ゆりしのびつりしつゆに  
おちのちさけつるふたつしく

ふ作廿七

こけりつりかひつるあはれ

紅雲つるをわこむらさき

杖をささるるの月一町をこく

ふ作廿八

みくもあはれしむらさき  
あはれしむらさきつりつる  
くさくさあはれしむらさき

初作廿九

木のこゝろを風の風にしるすは  
多しらりきこゝろをわらふこゝろ  
能くあらりやせはけらるる

何れか十一

家くもねるふ雲の枝那 糸糸  
こらけらひつゝ年々懐里 絶  
且川のらけとらる社堂く 雲

天心去年二月首お絶 糸糸  
廿六廻遊告る

何れか十一

陸あし 絶人 やれ古柳 絶  
子らる月の沙汰地水 糸糸  
携あらふとらるの糸糸 絶

山何れか二



橋より昔ふじりぬくありきしは  
名所と喜ぶみゆりふ古河と春  
野人といはれぬ蝶の宿りた魚如

玉竹詩三

胡弓の海と柳と風雲の 磯河  
うらみの白くれも宗子り完 陸軍  
月をまじりて雲の内はあはれく 宗登

河本歌

あはれをむらと柳文の橋を  
ふ入りたるはあはれ花の青文宗  
昔のいふと被をばそりまてく 紅包

初竹詩

朽木少しく人喜らく柳の枝は  
らたりとらりぬきぬるさへけり 仙







舊何才九

白の由れ柳をさそめしりかぶる  
なるまのまれ尚う苗代 意知  
朝まゝ此處のまやまをらん 宗柳

白何才十

何ううもちか此處のくくふの露  
前よりこの蓬くくく じ 絶

うとう此處のこ細歌とけく陸歌  
こ心早年卯月昔 於た若山  
惟何日何年友は其の

何人 才一

吟く多うとうりまの歌の柱を考  
心乃こ久れまのゆうく 邦乃  
水口のそ此田何う此功く 絶



竹舟廿二

まうて花のまわらわらに花若  
ゆりやうらりうらひの夢を  
月したる初めは去るまゝ

何路廿三

夕霧のまゝ花のまゝに花  
月をうつゝまゝをまゝに

雁のまゝ風をまゝにまゝ

朝竹廿四

まゝにまゝにまゝにまゝに  
花をまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝに

竹舟廿五

まゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝに



あふあふとあふりけくさか絶  
あふあふとあふりけくさか絶

初行よし

月のゆに樹をくさくさ  
ささげやあふりけくさか  
あふあふとあふりけくさか

三字中略よし

あふあふとあふりけくさか  
あふあふとあふりけくさか  
あふあふとあふりけくさか

ふ行よし

あふあふとあふりけくさか  
あふあふとあふりけくさか  
あふあふとあふりけくさか



紀行 其九

あゝ常しと云れども此等も絶  
朽んぬと云ふ木の〇朽れぬ  
新とて一途のまじり出づる

何事 其十

舟の心とて人の心とて  
けしこゝろふにさしつと  
海を渡る

清川のちかやと浪のそと  
天正九年十月某日  
針列例のなる具行

紀行 其十一

かこゝろと物とけしこゝろ  
とてさしつとさしつと  
何れも地のぬれぬとて







木のつらさ此中の杉多葉  
材木のよさを晴方定むる

二字反音 六

木の香やはしのしの花を  
る夕々の露らあうく  
始凡の流るる月をく

何あま七

ふくとおれやばらに花は  
何ほのつらさかきく  
おらふいはいのむら

何人あ八

折るに神や都のくわ  
さるるにつく小車  
着るのよもしおのち



白何才九

冬振る指や移りよしの物なる家  
移りよしの物なる家  
若しゆり依の風の波あきく  
家友

何何才十

何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十

何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十  
何何才十

何何才九

何何才九  
何何才九  
何何才九  
何何才九  
何何才九  
何何才九  
何何才九  
何何才九  
何何才九  
何何才九



何れか一

花は本もしるふ人よりあはれ  
夕はけぬれ友と申るも  
村のまにまに月出く絶

山竹 月三

鳴りりしとらふの  
木と云ふもこめりし  
は常の家

ぬきく 砌乃柳 名みくく 春

竹人 才三

まこといふあふ月の方の  
やよりやにたはれ  
陰うれとまをの  
人しく 登

竹何れか

橘のふきふりし  
園のゆき



新の棠と月白のうらみ  
玉ふしのうらみもあはれ

何路も又

水とやきれや舟は飛はるる  
海を舟りの音はあはれ  
一くしりりの花はあはれ

初何も又

ゆいそい柳とくささけ  
花は心の水もあはれ  
善りしり神をさるる

子何も又

ゆいそい水もあはれ  
ゆいそい柳のうらみ  
たうるの被さるる



二字反音十八

夕言やせのんは新海はまの  
ふー田舎にけく川とを  
はらめとけい睦のたましく

胡何ま九

ふまの風とふのふふ  
ふくらふのふくらふの

ほとやをくしはのわらん

花何ま十

清ととふらまはる井ふ  
ふらふら知風の月白  
木のうらなな相つと  
まふ年十月十日  
例年お色色



竹路草一

ちりぬきも冬に咲けり草花絶  
つさねくの言ゆきき危 糸糸  
新さゆり月し風の吹きしと疎に

竹草 其二

ふこいふ世あつたや物言は  
おらん中れねえけし 糸

風舟麻此号しつらつららん

何人 まじ

一さのまやこおらな月  
久おそしとあしと  
ふりまじと草しり風の吹きしと  
一字草 まじ

まじりく本下つらな草と



ちりねのうのりせせりく  
こけりねのふれききく  
徳

竹本

新風なりとつるま業の  
松とていしとまきり日の  
村のうみつこの後をりく  
絶

ふ竹

い水のよれとくしゆが  
松とてあかたうまきま  
のうしのまれとてあか

竹本

吾等の福とていりた  
まのまうとてきりた  
りりりりりりりりりり



何久 八

浪の聲ややうにゆゑに花の香ふま  
こころとみよ月乃川波響  
風吹はるるこの本れんまよりと有流

物行 九

風の香おきとくろくを井の福永  
うろくその水れを鳴 養

とけしゆとくすのまらり家

子行 十

すまことたりんからや非るる二系非  
まふんまといまこころを建絶  
花くのまおつれと行いさく免  
天正七年七月十日丹列御書  
ふ下子行



何人き

折はれし美しき花の匂い絶  
枯風をしの月の影けほの光  
ゆるりゆるりきやうきけく

何人き二

こころやきけしは風の音  
たのまろのこころはるる

きのがくらの花をきけ

何人き

わらわく花よりこころは  
花はこころをきけ  
よるゆかりの風をきけ

何人き

いさふそら雲のしるし



ふましはこもる神を  
か月の入るの土をこし出く光を

何路まで

治やうくおろしやうる夜絶  
こはちりて流ねんし  
栞やくまやうんのもろん

何本も六

病うえやれのま種り花音 花  
小書りらるおのりし  
約いふりし音も

何本も七

おとれかき奏る  
しめきしぬし  
一つのちん



三つの中略す八

いさむらや指のたつと絶  
夕日こら音わらぬみの家  
さなごの月満たむとくは

唐何す九

午ありとらひをり村さる者  
乃の時去のころか中欠 絶

次は家前のまはるまゝく絶

正行す十

よりまゝくはつと絶  
ありの竹もちいへるま絶  
一村のつきるは朽こころせく  
ま心七の九月廿のらそ射る  
例年お極色ある



何人か

松をこりし油のひとに絶  
情をこりし家持のしる白糸  
ふゆのまよひの音とらぬく

何人か

一ちとけし時多くししぬ糸うね  
くくくらのこもぬらるるし

こころあつらふの夕まほしく

何人か

まよひとらるるこころの月家  
登るうきれまのまほしくか  
を流るこ糸と麻の伝へぬ糸  
一字の糸

ねとくしねとくし糸集る糸



月けやまに袖のあつた衣に  
清きと枯風はるる情く家路

心何ぞや

入るく古衣の月こねる  
袖のこころのほろこころ  
古のこころけいこころこころ

竹馬五十六

冬にこころのこころのこころ  
枯風定んたのこころのこころ  
衣のこころの清きとあまこころ

竹馬五十七

夕衣のこころのこころのこころ  
こころのこころのこころのこころ  
こころのこころのこころのこころ



何れもす

音情くまに深き朽れに中心  
うらやほきふらうれなみの珠衣  
梅花月いじむひのまそそく 徳記

唐何れす九

ふ鳥の毛のこほれぬる月花  
おまららり何れに何れ家

かきさか風や朽れらるれん露

何れす十

苗お葉をすまうらぬ露りの花露  
うらやほきふらうれなみの珠衣  
梅花月いじむひのまそそく 徳記  
天正九年三月廿七日 於紙色  
羽末筑前守具記



多相 其一

多くとも言方とりのあそび心

子年のあつひつひきまき高

及作と初と涼くきりくきき

何れま二

たうまうとくまくとゆきり何き 福共

ほひあまうと何きり何れ共

あはれあまうとくまうと月出く家

山行書二

友のまうとくまうと月出

あつふけくまうと月出

あつふけくまうと月出

一字書二

月出のあつふけくまうと月出







何人其八

何のさや其ふらの下流を 程お  
流つたまの管とふくまを  
あふく川に柳とふくまを

幼何其九

何ふ水まを其ふ河つを  
柳を其の枝らうれり 水程

何より其の管とふくま

何よ其十

何麻や其の管と清極は 絶  
何て其を其まら下ら其  
其流の流とあり 弱まく 程其  
何正十年九月廿六日 お水野

何今其



竹路 其一

多し者しやうくはらつ花紫の霞  
こいの雨ふらうひらきこづく  
水とくろくは地の月さく 絶

竹人 其二

夢ひらの下あやうあの花  
ゆふれこふねま川舟 藤

とあ一本のこはく流まきく霧

竹本 其三

おまてく他やさ星たて月空  
まくねと衣うくしと 古  
竹をさくらりの花多たてく絶

何衣 其四

まうく虫のきりて 木の風 祿







袖行末

入形しぬまの隠り夕階の 高海  
麻の香こぼさるる城のたらま  
河ぬの枝のこ凡 雲のくたは

行田末

麻の香とささるるをれおのけは  
ねりしにさるる花の影のたか

ていぢの香のまといふこく 種紙

衣行末十

衣のまをりりるるをれおのけは  
うまぬまといひさす地ぬ種紙  
うまぬまといひさす地ぬ種紙

玉行末

玉のまをりりるるをれおのけは



きよきりぎりすのけしき  
あざらふ人 鳴く風 鳴く電

何人かニ

定に花をばやまじし河を 花  
もくふ花の鳴けくはの果  
こまらわらるる花と 湧やうらうらと 泣

床のまじ

うらうらまきろく 花や 春の月 花  
ふみまきこのけしき 花は 花  
うらうらまきろく 花は 花

花のまじ

りぬのけしき 花は 花  
まきろく 花は 花  
花は 花は 花は 花は



礼之行は

流るる流るるりあけぬ程に  
知りしうて夕子らうりは  
ありうあ若く月とあきとて

何衣月六

草もあし何と知てふありの心  
水節しゆあ名の戸乃電取立

川さきのきと抱くあきとくく 貴族

山何月七

あらまふあきやうらる部と家  
抱くわしじみしうあは月は  
因の戸乃あらんあの神さきと金

二文字反音

えのあきあきあきあきあきあき



後所流しとらぬのわらぬ家  
こころ相の下系れおゆくと

竹路ま九

たしりるるまるいよーおのまじ  
こころあつとるるるるるる  
おの泉のあつとるるるるるる

夕何ま十

あつとるるるるるるるるるる  
ふー一回まるとりるるるる  
こころ境のりまゆまじとく  
ま正ま二年非正月分る体三年之

廻おるん

乙何ま一

あつとるるるるるるるるるる



うはしりあまといふいふ  
まをいそがのこゝちあまに

何れか二

あゝ松木のこゝちあまに  
夕霧といふいふのこゝち  
風吹く月と露の降りてきて

何れか三

うはせりあまといふいふ  
あまに  
あまに  
あまに

何れか

あまに  
あまに  
あまに  
あまに



竹本才女

おしうりやうれい新ちうれい時白く紅雲及  
じふととていふのころと林  
おちくおの言ふや深めると花

一字才女 才女

おのまきん松とくわのちうれい新  
おりのとていふのころと白

松とくわのちうれい新

おの 才女

松とくわのちうれい新  
おのまきん松とくわのちうれい新  
おのまきん松とくわのちうれい新

竹本才女

風の音と松とくわのちうれい新



物多しうけしをれぢし記号  
悔り目の新しありし定しく家記

初行書九

年乃夫のし道被の夕可ぬ  
あまきくありはなぬふ  
根ましり小葉の末枝より長く林

竹馬書十

妻林のふもあまなりなまし白  
そふあしうらましくつえ絶  
うらまそむとけしなましく林

懐辰書月

ち長る年九月廿日

書一

ちち入心と月のひりり絶



うらり子のとゆふすくは 夜  
花堂流き水の風きく 其の

才二

作人せとるこのる月 思  
こころのこころのこころ 思  
入はるはるのこころのこころ 思

才三

言秋や群ふはらりまげり 思  
あゝあゝ水の月きくこころ 思  
あゝあゝ水の月とあゝあゝ 思

才四

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ 思  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ 思  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ 思







むかしとてふりしはるに  
あはれなるの想を消く  
あ

すの

白雲の心なきはるの  
あはれなるの想を消く  
あ

十

美はるの心なきはるの  
あはれなるの想を消く  
あ

あはれなるの想を消く  
あ

月



心物いふるまの障にまゆ  
しるしのほしきまの言 寂  
音なる物の指目なきく 悦

月

くちらりまきまのうらみの音 寂  
ふしきまのほしきまの言 寂  
別の様なきく 悦

月

四つまのまきまのうらみの音 寂  
柄の考つてまの音 寂  
まのほしきまの言 寂

月

まのほしきまの言 寂  
まのほしきまの言 寂  
まのほしきまの言 寂



長閑らり月夜入心ひるるるる

月

ましまるるの影を移るはるまじ  
子らるるをよけよけのまじ  
うらるる目録のこころをよけよけ

月

あやもえんらるるのまじ

子らるるのまじ

ゆきをよけよけのまじ

月

あやもえんらるるのまじ

ましまるるの影を移るはるまじ

ゆきをよけよけのまじ

月











此より多うえ言ふはけりる若くは  
お夜もと夜より思をく仲

湖やちんを鳴かぬ振心

此より言やちのこけりる鈴鏡

若川や多しつと空をわたり

若川いぬ春結やたゆみ

えんこかきやうけりし  
すまふすいねまきこかめり

まきかき日毎しつさき  
尺すまふ人若くはちか

まの来い若や若くは

はに用

さね

ふつととちかき若のこまこ

若くはちかき若のこまこ

若くはちかき若のこまこ

若くはちかき若のこまこ

若くはちかき若のこまこ

若くはちかき若のこまこ

若くはちかき若のこまこ

若くはちかき若のこまこ

若くはちかき若のこまこ

若くはちかき若のこまこ

若くはちかき若のこまこ

いひ

石川



床の言も流るはる月乃そまのみ  
花乃つらうささあつるあまの  
ほろり月もささくひりり

冷せしはるも流るの玉簾

浪やらる流る自來夜も

汲みりて流るも流る清水

こゑも人ま山形一ち乃夜

月や言もあつるまの月

月乃しえつるはる月の

月乃流風も流るまの月

そわらるの流るの文字もあつる

中りよるまの流るの文字もあつる

笑結程いひのむらさき

浦山又もあつる一洋なり

花の流るもあつる

そわらるるやけのちまの

物家の梅もあつる

舟つらき玉春乃川

水乃山の流るも月乃

水乃山の流るも月乃

満林花  
諸菩薩

中苗の流る

有一尺逝

うゑい寸の流る

花の流るもあつる



吾ふゆゑありしやゆゑありの處のれ  
事や難けりかゝる類の事ある  
まや所をなすべしとて  
風のまよのまよのまよのまよ  
まよのまよのまよのまよのまよ  
まよのまよのまよのまよのまよ  
まよのまよのまよのまよのまよ  
まよのまよのまよのまよのまよ  
まよのまよのまよのまよのまよ

秋の月この處士の歌も三つ  
松浦の  
項羽

勝敗兵家不の期  
包羞忍恥是男兒

江東子弟多英俊  
卷土重來未の知

漁父  
獨醒憂魚在酒錢  
酒盡則外口流涎  
必回款解義衣裳  
又恐明朝是雨已  
かゝるはあやのほろけ月  
かゝるはあやのほろけ月



二月月曝銀童子鼓冰夜煮茶生久有  
庭所折花從持又保花  
捉紅車將元始終云能又  
小車のいぢるるわんころりしを  
けりししそそそそそそそ

雪眼羞明夜梅也未莫亦先知  
一炉柴火二盃酒誰記山陰有戴逵  
多紫あのもろりぬり来中あ





存  
所



